

本科 1 期 4 月度

解答

Z会東大進学教室

# 医系小論文



出典：東京学芸大学・教育（国際教育）・99年

## 解答

## 問1

今の学校教育は、入試や進学にとって重要な学力を重視し、教科教育に比重を置く。学校教育の果たす役割には、一つのことを友達と協力して成し遂げる過程で、主体的に自分の為すべきことを発見し他者を思いやるといった社会性を育てることもあろう。教科教育に比重を置いた今の学校教育の現状は、その役割を十分果たしているとは言えない。いじめや学級崩壊、不登校がそれを裏づける。

その学校教育に、主体性や自発性がなければ続かないボランティア活動を取り入れることは、子どもの精神的成長を促し、社会性を育む機会を増やす。その点で有意義である。阪神・淡路大震災の際、学校に適応できず不登校だった高校生が、被災者を手助けするボランティア活動に関わる中で、偏差値だけが全てではないと気づき、福祉に関連する仕事に就く道を見出した例もある。そうした例が、学校教育にボランティア活動を導入する意義の具体的根拠となる。

## 問2

ボランティア活動の本質的特徴は、自発性や見返りを求めない点にある。学校の現状は、子どもを評価の対象とし、「しなければ卒業できない」「この教科でこの程度の成績をとらなくては進学できない」と、子どもの主体性や自発性を伸ばす場ではなくなりつつある。そうした場に、子どもの思いやりや社会性を育てるためという名目で、ボランティア活動を取り入れることは弊害を招くと思う。

その弊害とは、自発性や見返りを求めないという本質を歪め、ボランティア活動を子どもにも強制しかねない点である。学校教育の一端だから仕方なくやるもの、内申書の評価をよくする手段、というように認識する子どもも出てくるだろう。AO入試で自己アピール

することが何もないから、夏休みに慌てて福祉施設でボランティア活動をする高校三年生がいと聞く。こうした例が、学校教育にボランティア活動を取り入れる弊害を具体的に裏づけてくれる。

## 次章 問 1

### 【文章例①】

「ボランティア活動を学校に取り入れること」という論題について、既に述べられている肯定・否定両方の根拠を踏まえた上で、私は、賛成の立場をとる。

ボランティア活動は、自発性や見返りを求めない点が本質で、活動を学校教育の一環として取り入れることは、その本質を歪めかねないという、学校教育の現状に関する危惧感は理解できる。だが、学校を今のまま、教科教育に比重を置いた、子どもの社会性や主体性の育成という点で機能不全状態にしておくのは問題である。また、子ども達にとっても、たとえきっかけが学校での評価を上げることや、仕方なくやらされている側面が強くても、弊害ばかりだとは言いい切れない。

人間は最初から皆、主体性や自発性、そして奉仕の精神を持っているのだろうか。「はじめは仕方なく、そして強制的にボランティア活動に参加させられていても、その過程で、自分が他者の役に立つ存在となりうることに気づき、そこに生きがいを感じ、いつの間にか自分からすすんで活動するようになった」と述べている看護学生の体験談を最近読んだ。看護の仕事に就こうとする人々でさえそうなのだから、小・中学校や高校でボランティア活動を取り入れることは、意義があると思う。ボランティア活動には自己啓発的な側面があり、きっかけはどうあれ、実際に体験してみることが重要だ。

以上の点から論題について私は賛成である。

### 【文章例②】

「ボランティア活動を学校に取り入れること」という論題について、既に述べられている肯定・否定両方の理由を踏まえた上で、私は反対の意見を表明したい。

偏差値重視型の大学受験の準備教育の場となりつつある小・中・高校といった学校に、ボランティア活動を教育の一環として取り入れれば、社会性や主体性の育成に貢献する可能性は多少はあるだろう。しかし、偏差値を上げるために教科学習に比重を置かざるを得

ない学校教育の根本的問題を改善しないまま、「評価の対象だから」「内申をよくするために……」と半強制的にボランティア活動を子ども達にさせることで、その主体性や社会性は育つのだろうか。「校則で決まっているから従いなさい」と強制することで、大人が決めたわけのわからぬルールに無理矢理従わされた経験と無力感が蓄積したからこそ、それが荒れた学校や不登校の子ども達存在に繋がったのではないか。

また、学校単位で仕方なくボランティアをする子ども達が、大勢押し付けてきたら、それを受け入れる側は迷惑である。ボランティアをする側の子ども達の存在が、かえってボランティアされる(援助され支えられる)側の生活を混乱させかねない。そうまでして本当に、子ども達にボランティア経験をさせる必要性があるのか。疑問である。

以上の点から、論題について、反対の立場を私はとる。

## 解説

### 1 出題意図

入試小論文で問われる能力の一つに、論理的思考力がある。「論理的に思考する」とは、「前提とそれから導き出される結論との間に筋道が認められて、納得がいく」(三省堂『新明解国語辞典(第四版)』より引用)ようにものを考えることである。小論文以外の他の受験科目の出題形式【例えばセンター試験のように、ある問い(問題)に対して、正解(答え)を選択肢の中から選び出す出題形式】で試されるのも、(選択肢のどれがなぜ正解で、どうして他の選択肢が正しくないかを説明できなければ、偶然に正解を選んできたとしても、それが論理的思考力の成果とはいえない点からわかるように)論理的思考力の一端である。

但し、他の受験科目で問われることの多い「唯一正しい解」を導き出す論理的思考力と、入試小論文で問われるそれとの相違点を認識しておきたい(その認識の欠如は、択一式問題に用いてきた対処法で、答えは決して一つではない「問い」への「答え」探しに取り組む……といった不適切な学習方法につながるからだ)。入試小論文で問われるのは、答えが容易には出ず「唯一正しい解」が存在するわけではない(前提が異なれば、複数の答え・結論が導き出されるような)「問い」に、独自の「答え(結論)」を導き、その「問い」と「答え」との間に、自分や(できるだけ多くの)他者に納得が行く理由があることを筋道立てて説明していくこと、また、それに必要な思考力である。

本課題のテーマである「ボランティア活動を学校の中に取り入れること」は、賛成/反対両方の意見が存在し、そのどちらか一方

が絶対的に正しい（或いは間違っている）わけでもない。そうした「テーマ（主題）」について、賛成／反対二つの立場に分かれて討論を行い、相手の主張に反論しつつ、自分の主張をいかに説得的に展開していくかを競うことが「ディベート」である。実際のディベートは、賛成側・反対側それぞれ同数のメンバーで、一定の制約の下で行われる。入試小論文では、受験生各自が賛成／反対両方の立場に立って考えることができるか（安易に決めつけず、複眼的なものごとを見、考えられるか）、その根拠（理由）を発見・説明できるかを問う出題形式が頻出である（そうした形式をディベート型と呼ぶ）。複眼的に物事を捉えることと入試小論文で問われる「論理的思考」との関わりに、何となくよいから気づいて欲しい……それが、本課題を選んだねらいである。

## 2 設問要求

ボランテティア活動を学校の中に取り入れること」というテーマについて、以下の問いに答える。

問1（テーマに対して）賛成する意見について考えられる具体的理由を提示する（四〇〇字以内）。

問2（テーマに対して）反対する意見について考えられる具体的理由を提示する（四〇〇字以内）。

次章問1 本章の問1・問2（で提示してきたこと）に対する自分の意見を論述する（六〇〇字以内）。

## 3 問題へのアプローチ……次章問1までの関連性を探り、本課題に取り組むポイントを理解する

### ① 設問分析

「分析」とは、「複雑な現象・対象を単純な要素にいったん分解し、全体の構成の究明に役立てること」（三省堂『新明解国語辞典（第四版）』より）である。興味関心の対象を本質的に理解しようとする者、例えば、「流行」という社会現象に興味を持つ社会学者は、ただ漠然とそれを見ているわけではない。「流行現象はなぜ発生するのか（＝現象の発生理由）」「流行現象が発生し衰退していくプロセスとはいかなるものか（＝流行現象の発生→衰退プロセス）」等の複数の論点（論ずべき問題点・解明すべき点）を自ら設定する。そして、観察・調査等の科学的方法から得たデータに基づき、それらの論点に対する「答え」を研究成果として積み重ね、その蓄積を「総

合」することにより、理解を図る。つまり、興味関心の対象となるものの理解には、その対象をあくまで「全体（一つのかたまり）」として見続けるのではなく、複数の「要素（部分）」から構成されたものと考え、ひとまず要素に分解し、各要素がどのようにつながって「全体」として成り立っているのか知ろうとする作業が有効である。そのような「分析」が、対象の本質的理解に繋がるということも知っておきたい。実はその「分析」が、出題者の意図を外さず（的外れにならず）に小論文課題に取り組み上で有効である。

本課題は、三つの「要素（部分）」（＝三つの問い）から構成されたもの、と捉え、その三問の関連性（繋がり）を探る……というように、課題全体を「要素に分けて見る・理解する」分析作業が、手がかりを提供してくれる。特に、本課題のように、小問が複数設定されている時は、各問を別個のものとして捉えるのではなく、「それらの関連性は？」、「まず賛成・反対それぞれについてこういうことを考えさせ、最後の次章問1で『自分の考え』の論述を求めている出題者側（大学側）の意図は何か？」などと、分析的に捉え、考えを取り組みたい。

## ② 本課題に取り組み上でのポイント

(1) テーマ（Ⅱ）「ボランティア活動を学校の中に取り入れること」についての議論を、一人三役のつもりで展開する

問1（ボランティア活動の学校教育への導入に）肯定的立場に立つ↓その具体的理由を考え提示（説明）
問2（ボランティア活動の学校教育への導入に）否定的立場に立つ↓その具体的理由を考え提示（説明）
次章問1 本章問1・問2に対して（＝肯定／否定両方の立場からの理由説明を踏まえ）自分自身の意見の論述
↓肯定／否定二つの立場から議論が展開されるのを踏まえ、最後に、（ボランティア活動の学校教育への導入について）自分自身の意見を論述する

本課題は、「テーマ」について、右記のような立場から複眼的に考えるよう、出題者側が予め立場（役割）設定している。

要するに、ボランティア活動の学校教育への導入という「テーマ」を巡り、まず、賛成の立場に立つ人、反対の立場に立つ人、そして「自分自身」の三人が議論をする場面を想定し、**本章問1・問2**では、自身の本当の意見（考え）は脇に置き、賛成／反対両方の立場から、その正当性・妥当性の根拠（理由）を具体的に考え説明する。その上で（最後に）、自身の意見を論述する。簡単に言うと、テー

マについて三人が議論をしている、君以外の他の二人が対立的な立場をとっていて、最後に君自身の意見が求められている……そんな場面に置かれているつもりになって、取り組むとよいだろう。

## (2) 議論の前提を整理する……キーワードに注目する

あるテーマについて議論を展開していく過程において、大切なことがある。それは、議論の前提（＝議論が成立するための土台）となるキーワード・キーコンセプトについて、議論に参加する者が互いに明確にし合うことだ。本課題に当てはめて考えてみよう。「ボランティア活動を学校の中に（＝学校教育の一環として）取り入れること」に肯定（意義・メリットありと判断）／否定（弊害・デメリットありと判断）いずれの立場をとるにせよ、「ボランティア活動」とはいかなるものか、「学校（教育）」とはどういうものか、自分なりに明確にする必要がある。（議論を始める前に為すべきことである）。

言葉・概念の捉え方は、人それぞれ違うことがある。「ボランティア活動とは何か、どうあるべきか」「学校教育とはどういうものか、どうあるべきか」について、人によって考え方・定義の仕方が異なるからこそ、「ボランティア活動を学校教育に取り入れること」というテーマに対して異なる立場の見解が生ずる。それを無理に統一する必要は全くないが、互いの考え方の相違を明らかにし議論を深めていくためには、議論の前提となっているキーワードに注目し、互いの考え方・定義を明らかにする。

（注）……「ボランティア活動」「学校（教育）」というキーワードの定義に参考になるであろうことを、後述の【関連事項】で触れておいた。基本的には、各自が自分なりに考えるべきだが、参考にしてよい。

## (3) なぜ、今、大学側が「ボランティア活動を学校の中に取り入れること」について、受験生に考えさせたいのか

小論文課題に取り組み、設問要求に適切に応えていくヒント（糸口）として、「なぜ、今、大学側がこういうテーマについて考えさせたいのだろうか」と自問してみるとよい。入試小論文では、近年、現実社会で議論の対象となった（なっている）様々な社会的問題や現象、事件等に関連づけた内容の出題が多い（この傾向は、自然科学系・社会科学系・人文科学系全てに共通している）。

そうした出題の背景には、受験生が、現実社会で起こっている現象や問題に関心をもち、それらを他人事としてではなく自分に引きつけて考えようとしているか（社会的問題への問題意識・関心の有無）をチェックしようとする、大学側の意図が存在する。その点を認識し、「最近、このテーマに関連する社会的問題や事件がなかったか」等、君達自身がテレビや新聞、雑誌などのメディアか

ら得ている情報をフルに活用したい。

まず、各自の持つ知識・情報を基に課題に取り組み、その後、そのテーマに関連する背景知識・情報の不足を自覚したならば、『現用語の基礎知識』『知恵蔵』『イミダス』や『朝日キーワード』等のレファレンスブック（用語集・事典などの参考図書）で調べ、といった作業を重ねておきたい。また、そうした情報収集に時間や労力をかける余裕があまりない場合は、日頃何気なく見たり読んだりしているテレビ報道や新聞を、有効な情報源として活用する（志望学部に関連するテーマ・時事問題を扱った新聞記事をスクラップする等）。後述の【関連事項】に、本課題のテーマである「ボランティア活動を学校の中に取り入れること」に関連する事実や背景を、簡単にまとめておいた。参考にしてほしい。

#### 4 論述へのアプローチ

##### ① 本質問1への対応

##### ★ 要求の再確認

- |   |
|---|
| <p>① 「ボランティア活動を学校（教育）に取り入れること」に賛成する意見の、<b>具体的理由を考え提示（説明）</b>する。</p> <p>② 四〇〇以内にまとめる</p> |
|---|

本質問1では、ボランティア活動を学校教育に導入することに肯定的立場に立つて考え、その具体的理由を提示すればよい。つまり、そうすることに意義やメリットがあるとし、具体的にその意義やメリットとは何なのかを説明的に述べる。ここでは、君が本場に「ボランティア活動を学校教育に取り入れること」に賛成の意見を持つかどうかは関係ない。あくまでも、賛成の意見を持つ側（肯定側）の論理を君が理解・想像できるか、そしてそれをどれだけ具体的にわかりやすく説明する表現力を持つかが問われている。

考える手順として、まず、議論の前提を自分なりに明確にしたい。つまり、「ボランティア活動」とはどういうものか、「学校（教育）」とはいかなるものか自分なりに明確にする。その上で、「ボランティア活動」のこういう側面が、「学校教育」の現状をみる



と果たすことのできていない役割について、具体的な形で役割を果たすだろう、そしてそれを裏づける事実もある……と展開できよう。

考えたことをどう説明していくか、また、賛成する具体的根拠をどう発見するかのポイントは、「ボランティア活動」のどのような特徴が、今の「学校教育」の現状（問題点・欠陥等）を補う上で、どのような意義・メリットを持つのか、気づく（発見すること）である。それには、あなた自身の「ボランティア活動」をした体験や、「ボランティア活動」に励み継続的にそれを続けている人々の心理・行動などを「分析」してみることが有効だ。また、「学校教育」の現状、特に、今の「学校教育」のどのような側面が、子ども達にどのような影響を及ぼし、どのような問題を発生させているのか……と「分析」してみる。

このように考えてきたことを、実際、四〇〇字という少ない字数の中で、どのような順に整理してまとめるか。考えたことを整理しないまま（つまり、「読み手」にわかりやすく伝えるということを意識しないまま）書くのはやめよう。四〇〇字という少ない字数だからこそ、その字数の中でどう展開していけば、「ボランティア活動を学校教育に取り入れること」に賛成する側の具体的根拠・考え方の筋道が、自分以外の他者（「読み手」）に伝わるか、構成を練る。論じ方に「唯一正しい解」はない。ここで述べられていたことに注意し、まず各自が工夫して展開してみよう。

四〇〇字の短論述なので、基本的には二〜三段落の構成にし、議論の前提の整理↓肯定の立場をとる具体的理由（根拠）の説明……という筋道で述べていけばよいだろう。

なお、「ボランティア活動」を「学校教育」の一環として導入することを、奨励し評価する立場に立つ人々の考え方の根底には、子どもや若者を巡る諸問題（少年犯罪の多発や学級崩壊、いじめ、不登校等）の発生に、今の「学校教育」のあり方が要因として関わっていると見る見方があるのではないか。進学や入試に直結する（各教科の偏差値を上げる）教科教育に比重を置くあまり、「学校教育」が教科教育以外に果たすべき機能（役割）を果たしていない、だから、その機能を補充・強化する意義が「ボランティア活動」を学校に導入することに見出される……という考え方の筋道ができる。では、その「学校教育」が果たしていない機能（役割）とは何か、また、それを補ったり強化しうる「ボランティア活動」の特徴とはどういうものか、それを裏づける具体的根拠とは何か……。

それは、君達自身で考えてほしい（ここで示唆したことや、解答例に書かれたことが全てではない。添削を受け、自分の書いた内容が妥当であるか第三者に判断してもらおうとよい）。

② 本章問2への対応

★ 要求の再確認

- ① 「ボランティア活動を学校（教育）に取り入れること」に反対する意見の、具体的理由を提示する。
- ② 四〇〇字以内にまとめる。

この問2では、ボランティア活動を学校教育に導入することに対して、否定的立場に立って、その具体的理由を提示すればよい。つまり、そうすることに弊害やデメリットがあると判断した側の論理の筋道とはいかなるものか考え、その弊害やデメリットとは何か、具体的に説明する。

考える手順は、本章問1の時と同様である。反対の立場の意見を持つ側は、「ボランティア活動」とはどういうものだと考え、それを学校教育に取り入れることが、具体的にどのような弊害・デメリットを生じさせると考えているのか。それを読み手にわかりやすく説明するつもりで表現する。

ポイントは、本章問1で述べてきたように、今の「学校教育」を十分分析することにある。その現状（＝学校という教育システムの現状）に内在する問題点と「ボランティア活動」の本質的特徴とが、どう関わり、どういう弊害・デメリットを発生させる危険性があるのか、それを裏づける事実はいかに具体的でないか……。

このように考えたことを、他人に理解してもらいやすく整理し、本章問1と同様、四〇〇字の中でどう展開していくか予め考え、表現したい。

なお、「学校教育」に「ボランティア活動」を取り入れることに批判的立場をとる人々の考え方の根底には、ボランティア活動の本質は自発的・無償的（見返りを求めない）部分だとする考え方があるように思う。では、そうした側面を持つ「ボランティア活動」を、「学校教育」に導入することの弊害は何か。その弊害は、今の「学校教育」が内包するどのような側面と関わっているのか、それを裏づける具体的根拠は何か。

そういったことを、君達自身で考えてみよう。

③ 次章問1への対応

★ 要求の再確認

- ① 問1・問2に対して（＝肯定／否定両方の立場から示された具体的理由を踏まえ）自分自身の意見を論述する。
- ② 六〇〇字以内にまとめる。

「問1・問2に対して」とあるので、もう一度、自分が書いた「ボランティア活動を学校に取り入れること」を肯定する側・否定する側の具体的理由（根拠）を読み直したい。その上で、それに対する「自分の意見」を論述する。つまり、問1・問2で提示された肯定側の具体的根拠および否定側の具体的根拠を比較検討しつつ、「ボランティア活動を学校教育に取り入れること」について、自分自身はどう考えるのか（肯定的なスタンスをとり賛成意見を持つのか、否定的なスタンスをとり反対意見を持つのか）論述すればよい。

このようなディベート型小論文の場合、肯定／否定いずれの立場を選択しようと、評価には関係ない。評価の対象となるのは、テーマ（論題）に対する自分の主張や立場の、正当性（正しく道理にかなっていること）・妥当性（判断等の正当性が認められること）をいかに説得的に述べているか、である。詳しく言えば、(1)肯定／否定いずれの立場にせよ、問1・問2で既にそれぞれの立場の正当性を立証する（裏づける）根拠が示されており、それ以上に説得力ある具体的根拠を補強できているか、(2)反する立場（相手側）への反駁（はんぱく＝相手の議論の弱い部分を突くこと）ができているか、この二点がポイントとなる。

特に後者、すなわち相手側を反駁していくためには、その論理の矛盾や飛躍を指摘したり、相手側の用いた根拠がその立場の正当性・妥当性を証明するに足るものかどうか確認し、そうでなかった場合、指摘する必要がある。

以上の基本事項を踏まえ、それをどう整理し展開していけばよいか、基本的な展開例を示しておく。参考にしてほしい。

【自分の意見の論述展開……基本的な展開例】

A 自分のスタンス（立場）表明

B 論証その一（反駁⇨自分の立場とは相反する立場の論理の矛盾点や論証不足等の指摘）

C 論証その二（自分の立場の正当性をさらに補強しうる根拠提示）

D まとめ（Aの再確認）

★注意！ この問は、あくまでも、**前章問1・問2**で述べられたことを踏まえた論述でなければならない。**前章問1・問2**の内容と、この問の論述内容とが関連性を持たないものであつてはならない。

### 【関連事項】

◆ボランティア活動とは……

広辞苑によると、「ボランティア (volunteer)」とは「志願者。奉仕者。自ら進んで社会事業などに無償で参加する人」だが、最近では「有償ボランティア」という言葉もあるように、意味が多義的になりつつある。基本的には、何らかの問題を抱えている個人や集団、地域社会に対して、その問題解決に直接的・間接的な形で（労働力提供、精神的援助、そして金銭や物品援助等、様々な形で）貢献しようとする人々の活動を指す。その活動の主な特徴として、①自発的であること、②慈善や奉仕、相互扶助等の精神に基づき、自己啓発的（⇨活動している本人にとつても、問題意識を深めたり知的刺激をうけるような）側面をもつこと、などが挙げられる。先述したように、無償（⇨無報酬・見返りを求めない）であることもその活動の特徴とされていたが、最近では、実費や交通費が払われたり、少子高齢化の進展に伴い、高齢者への給食サービスや家事援助サービスに貢献した見返りとして、将来自分もそれと同じ分量のサービスが受けられるシステムが地域単位で構築されたり、返報的・有償的な活動形態もボランティア活動ととらえる見方もある。

◆学校（教育）とは……

一定の目標に従って、計画的・組織的な教育活動を行う教育機関が「学校」であり、そこで行われるものが「学校教育」である。学校は、現代社会における教育の中心的役割を担うものとされているが、それが全てでは決してない。家庭教育、社会教育とともに、教育全体の一つの部分を担うものである。日本社会においては、家庭教育の衰退や高学歴化に伴い、学校教育の機能（役割）にかなり大きな期待が寄せられているが、いじめ・不登校など多くの問題を内包している。

学校（小・中・高校）の教育課程は、主に、教科による教育活動と教科以外の教育活動に大別される。後者は、高校では特別活動、総合的な学習の時間である（小・中学校ではそれに道徳が加わる）。教科による教育活動は、従来、教科学習を通じて知識・技能・学力を児童（生徒）に共通に身につけさせることを主眼においてきた。しかし、一九八九年の新学習指導要領に基づく「新学力観」（＝子どもが自ら考え主体的に判断し、表現したり行動できる資質や能力の育成を重視する、個性と多様性を重視の学力観）への転換に伴い、学力評価も「知識・理解」から「関心・意欲・態度」に重点が移されている。また、教科以外の教育活動においても、先述した新学習指導要領でいう自主・自発的態度育成の必要性を前提とし、大学や高校入試改革で偏差値による学力評価一辺倒の是正（生徒の多面的評価の必要性）がうたわれていることも関連し、文化・スポーツ・社会（特に地域社会）活動及び学級・生徒会・クラブ・学校行事等の活動への参加が、評価の対象とされている。

◆なぜ、今、「ボランティア活動を学校の中に取り入れること」が論ずるべきテーマなのか……社会的背景……

ボランティア活動が教育場面において注目され始めたのは、八〇年代後半から九〇年代にかけてである。それは社会教育や生涯教育の観点からで、一九九二年の生涯学習審議会答申では、その柱の一つにボランティア活動の支援・推進をあげている。

学校教育や入学・就職試験において、ボランティア活動が、評価の対象に急速になり始めたのは、九〇年代半ば以降である（特に、九五年一月の阪神・淡路大震災で、多くのボランティア志願者が集まり貢献した事実も、それと無関係ではない）。また、教育問題解決のために設置された首相の私的諮問機関「教育改革国民会議」（故小渕恵三首相が設置し、森喜朗元首相が継続）は、二〇〇〇年九月に中間報告をまとめ、「教育を変える十七の提案」を打ち出した（一律主義から個性重視主義への転換、教育の原点は家庭であるという自覚、大学入試の多様化……等）。この提案の一つに「ボランティア活動を学校に取り入れること」がある。その具体的内容は、小中学校では二週間、高校では一ヶ月、共同生活等による奉仕活動をさせ、十八歳以上の全ての国民にも一年程度、高齢者介護などの奉仕活動を義務づけることを検討する、というものだ（その発案者とされる作家・曾野綾子は、「義務化は必要」と主張する具体的根拠として、自発性・主体性に任せたのでは既に意欲を持っていた子ども達が活動に関わるだけで、そうではない子ども達の主体性・自発性を育成することができない……むしろそれが大切なのでは？ という趣旨の発言をしている）。

こうした提案がなされた背景には、暴力で荒れる学校、いじめや不登校、学級崩壊、少年犯罪の続発……等々、子どもをめぐる

問題が深刻化し、大人や社会の側がそれに有効な対処策を見出せなかった現実がある。但し、この提案には、「ボランティアに強制はなじまない」「それで荒んだ子どもの心が救えるのか。安易すぎる」「福祉施設等の受け入れ側の負担は考えているのか」等の反対論が多く、その後、二〇〇一年春に提出された教育改革関連六法案の中（「学校教育法」）で、「ボランティア活動など社会奉仕活動、自然体験活動」と活動の幅を持たせ、具体的内容や期間は明示せず、教育委員会や学校の判断に委ねられ、強制色は薄められた。

